《開幕》
リー・ミンウェイとその関係展：参加するアート
―見る、話す、贈る、書く、食べる、そして世界とつながる

2014年9月20日（土）―2015年1月4日（日） 森美術館（六本木ヒルズ森タワー53階）

森美術館は、2014年9月20日（土）から2015年1月4日（日）まで、台湾出身、ニューヨーク在住のアーティスト、リー・ミンウェイ［李明維］の初の大規模個展「リー・ミンウェイとその関係展：参加するアート―見る、話す、贈る、書く、食べる、そして世界とつながる」を開催します。

1990年代後半以降、現代アートの世界では観客の参加によって成立する作品やプロジェクトが「リレーショナル・アート」、「関係性の美学」として注目を浴び、大きな拡がりを見せてきました。この潮流のなか、リー・ミンウェイもさまざまな観客参加型のアートプロジェクトを展開し、国際的に活躍してきました。本展はリーの作品を網羅的に体験できるミッドキャリア・レトロスペクティブ*となります。

展示は、リー・ミンウェイの代表的な作品やプロジェクト15点（新作含む）に加え、これらを歴史的、文化的な文脈から読み解く試みとして、白隠、鈴木大拙、ジョン・ケージ、イヴ・クライン、李禹煥、アラン・カプロー、リクリット・ティラヴァニ、小沢剛、田中功起など、他のアーティスト、宗教家、思想家の作品や言葉も併せて紹介し、展覧会がより重層的で豊かな知的体験となるよう構成しています。

「開幕の時点では、展覧会の完成度はまだ40%」とリー・ミンウェイ自身が語るように、会期中、各プロジェクトは観客とのさまざまな関わりを通して活き活きとした生命を得、日々変化し、複雑で多彩なレイヤーへと拡がっていきます。私たちが自分を取り巻く人々、環境、そしてより大きな世界や歴史とどのようにつながっているのか。本展が関係性やつながりについて再考する機会となることを期待します。

* ミッドキャリア・レトロスペクティブ：
アーティストのキャリアの晩年や没後に開催されるイメージが強い「回顧展」に対して、一定のスタイルを確立した中堅アーティストの数十年間の仕事を網羅的に見せる展覧会。

《プロジェクト・縫う（つくろう）》 2009年
展示風景：ロンバード＝フレイド・プロジェクツ、ニューヨーク、2009年
ルディ・ツェン氏蔵　撮影：Anita Kan

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報：瀧、町野、戸澤
Tel: 03-6406-6111　Fax: 03-6406-9351　E-mail: pr@mori.art.museum　Web: www.mori.art.museum
〒106-6150　東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー 森美術館

MORI ART MUSEUM

本展のみどころ

1. リー・ミンウェイのプロジェクトを総覧できる初の大規模な個展

リー・ミンウェイは1990年代後半から国際的に注目を浴び、ホイットニー美術館（1998年）、ニューヨーク近代美術館（2003年）、ロサンゼルス・カウンティ美術館（2004年）などでの個別プロジェクトから、第5回アジア・パシフィック・トリエンナーレ（1999年）、第50回ヴェネチア・ビエンナーレ台湾館（2003年）、第10回リヨン・ビエンナーレ（2009年）、第18回シドニー・ビエンナーレ（2012年）といった国際展まで多様な展覧会に参加してきました。日本でも東京都現代美術館「ギフト・オブ・ホープ」展（2000～2001年）、森美術館「秘すれば花」展（2004年）で紹介されたほか、資生堂ギャラリー（2012年）、堂島リバービエンナーレ（2013年）などでも近作を見せています。本展は、リー・ミンウェイの過去20年間の代表作を網羅する、これまでにない規模での美術館回顧展となります。

2. さまざまなタイプの「参加型」アートを体験

リー・ミンウェイの参加型作品は、ギャラリー内で誰もが参加できるもの、事前に申し込んで参加するもの、抽選に当たった人だけが体験できるもの、アーティストに代わってお客様をお迎えするホスト役となるもの、また全くの偶然で参加できるものなど、さまざまなタイプのものがあります。展覧会場でもらった花を帰り道に知らない人に渡す、思い出の布をエピソードを添えて展示する、言えなかった言葉を手紙にする、砂絵の上をあえて歩きイメージを崩すなど、アーティストが用意する多様な枠組みに観客の皆さんが参加することで、作品は活き活きとした輝きを見せていきます。展覧会はまるで生きているかのように、107日間、変わり続けます。

（左）
《布の追想》
2006年
展示風景：資生堂ギャラリー、東京、2012年
撮影：Sandy Wong Shin

（右）
《ひろがる花園》
2009年
展示風景：第10回リヨン・ビエンナーレ、フランス、2009年
エイミー＆レオ・シー氏蔵
撮影：Blaise Adilon

3. 個展でありながら、作品の文脈を読み解くために、他のアーティストの作品も併せて展示

本展はリー・ミンウェイの個展ですが、同時に、彼の制作活動において大変重要なキーワードである「関係性」や「つながり」を再考するテーマ展とも言えます。リーの実践の背景にある歴史的、社会的、文化的な文脈を読み解く試みとして、白隠、鈴木大拙、ジョン・ケージ、イヴ・クライン、李禹煥、アラン・カプロー、リクリット・ティラヴァニ、小沢剛、田中功起など他のアーティストの作品や歴史的な作品も「参照作品」として併せて展示します。

4. リー・ミンウェイ本人が、各プロジェクトをビデオ解説

リー・ミンウェイの作品は、作家本人の個人的な体験や記憶から生まれてきたものも少なくありません。本展ではこうした作品背景について、リー・ミンウェイ本人がビデオ映像で解説します。* 彼の穏やかな人柄が伝わる映像も併せてお楽しみください。

＊すべての作品ではありません。

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報：瀧、町野、戸澤
Tel: 03-6406-6111　Fax: 03-6406-9351　E-mail: pr@mori.art.museum　Web: www.mori.art.museum
〒106-6150　東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー 森美術館

リー・ミンウェイ［李明維］

1964年、台湾、台中生まれ。現在ニューヨークを拠点に活動。1997年、イェール大学大学院美術学部にて修士号取得（彫刻専攻）。見知らぬ他人同士がそれぞれ信頼、親密さ、自己認識などの意味を探ることを目的とした参加型のインスタレーションと、作家と観客が一対一で食事、睡眠、会話などの行為を共にするというイベント的な作品の両方で知られる。これらのプロジェクトは人々が日々交流することで、さまざまなかたちに変化する。個展にホイットニー美術館（1998年）、ニューヨーク近代美術館（2003年）、ロサンゼルス・カウンティ美術館（LACMA）（2004年）など。国際展に第50回ヴェネチア・ビエンナーレ台湾館（2003年）、第10回リヨン・ビエンナーレ（2009年）、第5回アジア・パシフィック・トリエンナーレ（1999年）など多数。

セクション

Sec.1　関係性、つながり、あいだについて考える

最初のセクションでは、周囲の人や環境との関係性、宇宙の大いなる動きと自分の身体との関係、連綿と続く歴史など、「関係性」、「つながり」、「あいだ」に意識を向けます。

《プロジェクト・繕う（つくろ）》

観客が持ち込んだ衣類や布を、アーティストやホストが繕う。その間に観客とホストの間でコミュニケーションが交わされる。繕った衣類は、壁面に取り付けられたコーン巻きの糸と繋げられ、空間はカラフルなつながりのダイナミズムを生み出す。

《プロジェクト・繕う（つくろ）》 2009年
展示風景：ロンバード=フレイド・プロジェクツ、ニューヨーク、2009年
ルディ・ツェン氏蔵
撮影：Anita Kan

《プロジェクト・女媧（ヌワ）》

古代中国の天地創造の神話に登場し、裂けてしまった空を補修したとされる女神、女媧（ヌワ）をモチーフにした凧の作品。この作品の「所有者」はすべての思い出や夢をこの凧にのせて空高く揚げ、その糸を切ることで女媧を再び天に放つ。

《プロジェクト・女媧（ヌワ）》 2005年
竹、シルク、綿糸、アクリル絵具　350×112 cm
撮影：Lee Studio

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報：瀧、町野、戸澤
Tel: 03-6406-6111　Fax: 03-6406-9351　E-mail: pr@mori.art.museum　Web: www.mori.art.museum
〒106-6150　東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー 森美術館

Sec.2　歩く、食べる、眠る―日々の営みを再考する

あらゆるものは変わり続ける、ゆえに「いま、ここ」を重視する仏教的な考え方を起点に、「歩く」、「食べる」、「眠る」など、平凡な毎日の営みをあらためて考えます。

《プロジェクト・ともに食す》

アーティスト本人、またはホストが見知らぬ人を一対一の食事に招き、対話をするなかで関係性を築く。展覧会の観客は、その記録の一部を映像で共有する。

《プロジェクト・ともに食す》 1997年
展示風景：台北現代美術館、2007年
所蔵：IUT美術館準備室、台北
撮影：Lee Studio

《プロジェクト・ともに眠る》

見知らぬ人と二人きりで一夜を美術館でともに過ごすという親密な時間と空間のなかで、関係性や信頼といった概念について考えるプロジェクト。

《プロジェクト・ともに眠る》 2000年
展示風景：第50回ヴェネチア・ビエンナーレ、2003年
撮影：Gary Lee

《ソニック・ブロッサム》

リー・ミンウェイが母親を看病した際、シューベルトの歌曲によって、気持ちが元気づけられたことに着想を得て発案された作品。展覧会の来場者から選ばれた一人だけに、歌曲が贈り物として届けられる。

＊ パフォーマンスは、展覧会場内で予告なしに行われます。

《ソニック・ブロッサム》 2013年
パフォーマンス風景：ユーレンス現代美術センター（UCCA）、北京、2014年
撮影：Mao Zhenyu

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報：瀧、町野、戸澤
Tel: 03-6406-6111　Fax: 03-6406-9351　E-mail: pr@mori.art.museum　Web: www.mori.art.museum
〒106-6150　東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー 森美術館

Sec.3　パーソナルな記憶から歴史、文化、社会のつながりを考える

リー・ミンウェイやプロジェクトへ参加する方々の個人的な記憶や体験を通して、日本と台湾の関係、社会の大きな変化や歴史に残る出来事が、個人にもたらす影響や関係について考えます。また、パーソナルな記憶の喚起といった観点から、日本で学んだ彼の祖父母の写真をはじめとするリーの家族写真も展示します。

（左）祖母、ワン・ユー（王氏有）の東京女子医学専門学校時代の学級写真、1930年代
（右）祖母の病院前（台中）での家族写真。前列右から2番目がリー・ミンウェイ、1960年代

《プロジェクト・手紙をつづる》

静謐な空間のなかで、観客は大切な人に言えなかった謝罪や感謝の言葉を手紙に託す。宛先が記され、封がされていれば投函され、そうでなければ他の観客に公開される。

《プロジェクト・手紙をつづる》 1998年
展示風景：シカゴ・カルチュラル・センター、2007年
撮影：Anita Kan

《砂のゲルニカ》

スペイン内戦中の空爆を題材に描かれたピカソの《ゲルニカ》を砂絵で描いたリー・ミンウェイの《砂のゲルニカ》を展示。展覧会会期半ばには、その上を観客が歩く、1日限りのパフォーマンスを実施。徐々に消失してゆく砂絵のイメージは、この世の無常観を伝える。

パフォーマンス日時：2014年11月16日（日）正午から日没まで
会場：森美術館展示室内

＊参加方法などの詳細は森美術館ウェブサイトにて公開します。
www.mori.art.museum
＊本パフォーマンスの参加、鑑賞ともに、当日の展覧会チケットが必要です。

《砂のゲルニカ》 2006年
展示風景：シカゴ・カルチュラル・センター、2007年
所蔵：財團法人榮嘉文化藝術基金會、新竹、台湾
撮影：Anita Kan

《プロジェクト・リビングルーム》

くつろぎながら、六本木の街の記憶についての話を聞くリビングルーム。アーティストのリー・ミンウェイ、森美術館館長や、公募参加のボランティアがホストとなり、持参した品や写真を用いて自らの思い出やエピソードを来館者と共有する（不定期開催）。

＊本プロジェクトのホスト／ボランティアを追加募集しています。
募集要項、および詳細は森美術館ウェブサイトをご覧ください。
＊本プロジェクトの開催予定は、森美術館ウェブサイト上で随時更新される「リビングルーム・カレンダー」をご覧ください。
www.mori.art.museum

《プロジェクト・リビングルーム》 2000年
展示風景：センター・フォー・チャイニーズ・コンテンポラリー・アート、マンチェスター、2013年
撮影：Kevin Ho

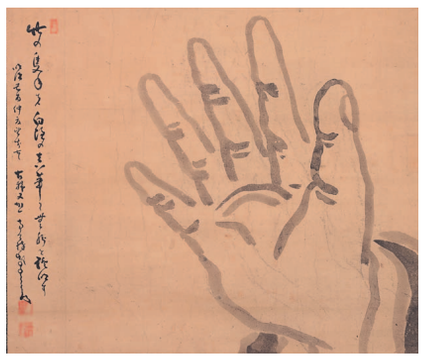
プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報：瀧、町野、戸澤
Tel: 03-6406-6111　Fax: 03-6406-9351　E-mail: pr@mori.art.museum　Web: www.mori.art.museum
〒106-6150　東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー 森美術館

▮「『関係性』を考えるための作品」のセクション

リー・ミンウェイの制作活動における重要なキーワードである「つながり」や「関係性」を再考すべく、また制作の背景にある文脈を読み解くべく、11人のアーティスト、宗教家、思想家の作品や言葉も併せて紹介します。

白隠(1685〜1768年)

江戸時代中期の禅僧。臨済宗中興の祖と呼ばれ、いったん衰退していた臨済禅を、時代に即応した新たな宗派へと改革し、その84年にわたる長い生涯を民衆教化に捧げた。夥しい数の禅画や墨蹟を遺しているが、それらには多岐にわたる分野からの引用が用いられ、時としてその解釈は難解を極める。《隻手》など、一見ユーモラスで軽妙、そして約300年前に描かれたとは思えぬほどの現代性をもった表現には、深く内包されたメッセージが込められている。



白隠 《隻手》 江戸時代中期　掛幅　紙本墨画
42.5×50 cm　所蔵：久松真一記念館、岐阜

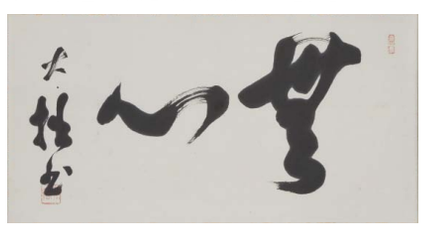
今北洪川(1816〜1892年)

幕末・明治時代の禅僧。明治時代に入り廃仏毀釈など激動の時代に、禅の教化と一般普及につとめた。山岡鉄舟ら数々の明治の著名人も円覚寺管長であった洪川に参禅したが、その中でも22歳の若き鈴木貞太郎が最晩年の洪川に参禅し、その後を継いだ釈宗演から「大拙」の道号を受けている。鈴木大拙はその縁で渡米し、英語での講演や著作を通して禅が「ZEN」として世界へ紹介され、新しい時代の始まりとなった。《円相》は、仏性、森羅万象、宇宙を象徴するものであり、禅の心をひとつの形に表したものといわれる。

今北洪川 《円相》 明治時代
掛幅　紙本墨画　34.2×59.4 cm　所蔵：雲頂菴、神奈川

鈴木大拙(1870〜1966年)

明治、大正、昭和時代の仏教学者、思想家。1897年、27歳でアメリカへ渡り、英語での仏教関連書籍の出版に携わる。12年間滞米し帰国後、大学で教鞭をとる一方、多数の著作を出版。約30冊にも及ぶ英文での著作をはじめ、80歳を目前に再度渡米し、以降9年間にわたり欧米各地で講演を行うことにより、禅が「ＺＥＮ」として世界へ発信された。1952年から始まったコロンビア大学での講義は、ジョン・ケージらが聴講し、アート、音楽、文学など多岐にわたる分野のアーティストに影響を与えた。



鈴木大拙 《無心》 明治〜昭和時代　一幅　紙本墨書
33.1×64.8 cm　所蔵：東慶寺、神奈川

久松真一(1889〜1980年)

哲学者、仏教学者。京都帝国大学で西田幾多郎に師事し、鈴木大拙から禅学の影響を受けた。「無相の自己(Formless Self)」という禅の思想を確立し、『東洋的無』をはじめ、『茶の精神』『禅と美術』など多数の著書を執筆し、仏教哲学者としてまた禅の求道者として、その91年の生涯を研究と禅の修行の中に生きた。茶人、書家としても長けており、久松が所有していた白隠の《隻手》について書かれた書が出品される。

久松真一
《白隠の隻手の声は耳もなく手も無く舌もなくてこそきけ》　昭和時代
短冊　36.3×6 cm
所蔵：久松真一記念館、岐阜

イヴ・クライン(1928〜1962年)

1950年代後半から60年代にかけて集中的に制作されたコンセプチュアルな作品やパフォーマンスを通し、宇宙を構成する第一物質(プリマテリア)の4要素のひとつ、「空気」を主要な素材として扱ったフランスのアーティスト。見えない領域や非物質性を知覚すること、それによって見いだされる価値を考えさせるさまざまな作品は、リー・ミンウェイの実践に通底する不可視の価値を喚起させる。

イヴ・クライン 《空虚への跳躍》 1960年
©Yves Klein / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo 2014
D0675
撮影：Shunk-Kender © Roy Lichtenstein Foundation

本画像は著作権使用許諾の条件上、ウェブサイトでは表示できません。

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報：瀧、町野、戸澤
Tel: 03-6406-6111　Fax: 03-6406-9351　E-mail: pr@mori.art.museum　Web: www.mori.art.museum
〒106-6150　東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー 森美術館

ジョン・ケージ（1912〜1992年）

20世紀の音楽にもっとも大きな功績を残した作曲家のひとりであり、音楽に偶然性や不確定性を導入したことで知られている。その背景には古代中国の占いの書『易経』、鈴木大拙を通して知った禅など、東洋思想の影響がある。そこから生まれる音楽や美術の考え方は、日常生活にあるあらゆる音や行為に意識を向けるもので、リー・ミンウェイの価値観に通じるものがある。

ジョン・ケージ　《R^{2}3 (Where R=Ryoanji)》　1983年
ドライポイント　18×54 cm　T.P., Ed. 25
川村龍俊氏蔵　© John Cage Trust

李禹煥（1936年〜）

60年代の日本における彫刻の新しい動向「もの派」の中心的なメンバーのひとりとして、その理論化に貢献した。物理的に存在するモノから、それを取り巻くバイブレーションや不可視のエネルギーに意識を向ける姿勢は、絵画からインスタレーションまで通底している。初期の絵画「点より」「線より」のシリーズでは、有から無への繰り返しを通して無限の世界を探求した。

李禹煥
《線より》
1976年
岩絵具、キャンバス
100×80 cm
所蔵：東京オペラシティ アートギャラリー

アラン・カプロー（1927〜2006年）

1950年代末、全く新しいアートのかたちとして観客が空間的な体験やインストラクションにもとづいた行為を行う「ハプニング」を提唱したことで知られる。なかでも「ハプニング」の類型のひとつとして展開した「アクティビティ」は、日常生活で無意識に行っている儀式のような行為を意識的に行わせるもので、しばしば観客のいないプライベートな環境が選ばれた。カプローの「アクティビティ」に見られる一対一の親密さは、リーの実践を理解するうえでも重要な鍵をにぎる。

アラン・カプロー
《7種類のシンバシー》
1976年
アクティビティ・ブックレットより
Courtesy: Allan Kaprow Estate, California, and Hauser & Wirth, Zurich, London and New York
撮影：Bee Ottinger

リクリット・ティラヴァニ（1961年〜）

アートシーンがグローバルに拡がった1990年代、人間の相互関係やその社会的文脈といった領域からアートを見直す「リレーショナル・アート」が注目され、その新しい動向を象徴するアーティストとして国際的に注目されてきた。なかでもギャラリーや美術館でタイカレーを振る舞うプロジェクトでは、日常が美術の枠組みに持ち込まれ、そこで生まれる会話や関係性が彼のアートとなる。

リクリット・ティラヴァニ　《無題1992(フリー)》　1992年
ミクストメディア　サイズ可変
Courtesy: GALLERY SIDE 2, Tokyo

小沢 剛（1965年〜）

1991年に提唱された概念「相談芸術」など、他者が参加することで成立する「参加型アート」の日本における先駆者のひとり。その後も、作品制作プロセスや展示空間で観客や自分以外のアーティストを巧みに巻き込みながら作品を発展させてきた。「ベジタブル・ウェポン」シリーズは「食」を介して政治的、文化的な差異を越えようとするプロジェクトで、2001年以降、世界各地で50回以上実施されている。

小沢 剛
《ベジタブル・ウェポン―芋煮／福島》
2012年
タイプCプリント
36.5×28.6 cm
Courtesy: MISA SHIN GALLERY, Tokyo

田中功起（1975年〜）

ロサンゼルスを拠点に国際的に活躍するコンセプチュアル・アーティスト。映像やインスタレーションによる作品と併行し、執筆や講演など言葉による実践も精力的に行う。日常生活における平凡な現象をループ映像にした初期作品から発展し、近年では複数の人間が関与することで生まれる複雑な関係性や心理状態などを映像やインスタレーションで見せている。出品作《どれもこれも》はその転換期の作品ともいえる。

田中功起
《どれもこれも》
2003年
DVD、カラー、サウンド
30分（ループ）
所蔵：森美術館、東京

- 最新のプレス画像は、森美術館ウェブサイトのプレス画像ストックより申請、ダウンロードいただけます。
  https://mam-media.com/jp/press-img
- 一部、プレス画像ストックにない画像もございます。ご希望の際は、森美術館広報宛メールまたはFAXにてお問い合わせください。

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報：瀧、町野、戸澤
Tel: 03-6406-6111　Fax: 03-6406-9351　E-mail: pr@mori.art.museum　Web: www.mori.art.museum
〒106-6150　東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー 森美術館

開催概要

主催：森美術館　**共催**：台湾文化部　**後援**：台北駐日経済文化代表処・台北文化センター
協賛：忠泰集團、財團法人榮嘉文化藝術基金會、信源企業股份有限公司、文心建設股份有限公司
制作協力：青山フラワーマーケット　**協力**：チャイナ エアライン カーゴ、ボンベイ・サファイア

企画：片岡真実（森美術館チーフ・キュレーター）　**古美術作品担当**：広瀬麻美（森美術館シニア・コンサルタント）

会場：森美術館　東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー53 階
開館時間：10:00–22:00 ｜火10:00–17:00 ｜＊ただし9/23、12/23の火曜日は22:00まで
＊いずれも入館は閉館時間の30分前まで　＊会期中無休
入館料：一般1,500円、学生（高校・大学生）1,000円、子供（4歳—中学生）500円　＊表示料金に消費税込
＊本展のチケットで「MAMプロジェクト022：ヤコブ・キルケゴール」、展望台 東京シティビューにも入館可（スカイデッキを除く）
＊スカイデッキへは別途料金がかかります
お問い合わせ：Tel: 03-5777-8600（ハローダイヤル）

展覧会概要

2011年の東日本大震災は、人為を越えた自然の大いなる力に対する私たちの意識を覚醒させ、同時に、被災地に世界中から寄せられた支援は、見ず知らずの人間同士の「つながり」や「絆」を強く感じさせるものでもありました。また、急速に拡がるソーシャル・メディアも、インターネットを介した新しい関係性やつながりを私たちの日常生活にもたらしています。

現代アートの文脈では、1990年代後半にフランスの美術評論家ニコラ・ブリオーによって提唱された「リレーショナル・アート」、「関係性の美学」が、観客参加型のプロジェクト、インスタレーション型の空間体験など解釈の幅を広げ、2000年代以降のグローバルな潮流のひとつとして継承されています。ブリオーは、「リレーショナル・アート」を「アートの理論的な地平を、個人的な主張や私的で象徴的な空間ではなく、人間の相互関係やその社会的文脈といった領域に置くもの」*としています。彼はこの背景に、世界的にみる都市化、インターネットなどのマルチ・メディアを通した人間相互の新しい関係性の在り方を見つつ、1960年代に拡がったハプニングやパフォーマンスなども参照しています。一方、ここでいう「人間の相互関係やその社会的文脈」から考えるアートを、東洋の伝統的な思想、あるいは前近代的な自然観へ拡張してみるとき、それは歴史や時空を果てしなく遡ることになります。具体的には、あらゆる物事や事象がそこに至るまでの因果関係、因縁の結果として存在すると考える仏教の概念「縁起」、ヒンドゥー教から仏教へも連なる輪廻転生や「業（カルマ）」といった死生観、諸行無常の概念と日常の営みへの自覚などが考えられるでしょう。

リー・ミンウェイ［李明維］は、1964年、台湾・台中に生まれ、現在はニューヨークを拠点に活動するアーティストです。リーの実践には、観客の参加を促すプロジェクト型のものが多くみられ、1990年代後半から2000年代にかけては主にリレーショナル・アートの文脈からも注目され、数多くの国際展に参加してきました。一方で、十代で米国に渡り、洋の東西をグローバルに往来してきた彼の実践は、東洋的思想、なかでも禅思想との高い親和性を感じさせるものです。人間の存在を森羅万象との普遍的な関係性のなかに見据えつつ、日常の営みや人と人のパーソナルな関係性に高い意識を向けるリーの実践の本質は、トラスト（信頼関係）やギフト（贈与）、非永続性、可変性といったより広範な観点からの解釈を試みることで、より明らかに浮かび上がってくるものだといえます。

本展は、リー・ミンウェイのミッドキャリア・レトロスペクティブであり、同時に彼の実践にみられる多様な「つながり」や「関係性」を再考するテーマ展でもあります。リーの実践の背景にある歴史的、社会的、文化的な文脈を紐解く試みとして、展示会場に設けられる「『関係性』を考えるための作品」のセクションでは、白隠、鈴木大拙、ジョン・ケージ、イヴ・クライン、李禹煥、アラン・カプロー、リクリット・ティラヴァニ、小沢剛、田中功起といったアーティスト、宗教家、思想家の作品も併せて展示します。また、リーのパーソナルなつながりを通して日本と台湾の関係を考え、さらには個人的な記憶を喚起するために、日本で学んだ彼の祖父母の写真をはじめとする参照写真も展示します。

一方、リー・ミンウェイのプロジェクトは、展覧会場を訪れて自由に参加できるものから、事前申し込みや抽選によって選ばれた方だけが参加できるもの、さらにはアーティストにかわって他のお客様をお迎えするホスト役を募るものまで、実に多様です。それらの概念的な枠組みは一見シンプルなものですが、そこで具体的な人々の記憶やつながりが喚起されることによって、各プロジェクトは活き活きとした生命を得、展覧会の会期を通して極めて複雑なレイヤーへ拡がっていきます。

* Nicolas Bourriaud, *Relational Aesthetics*, les presses du reel, 1998 (for English translation 2002), p.14.

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報：瀧、町野、戸澤
Tel: 03-6406-6111　Fax: 03-6406-9351　E-mail: pr@mori.art.museum　Web: www.mori.art.museum
〒106-6150　東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー 森美術館

⁉ 展覧会関連パブリックプログラム

■ アーティストトーク　※日英同時通訳付

展覧会のために来日するリー・ミンウェイが、本展の出品作を中心に、過去20年にわたる制作活動について語ります。「つながり」や「関係性」をテーマに制作される作品背景を、アーティストの生の言葉で聞いてみませんか。

出演：リー・ミンウェイ
日時：2014年9月20日（土）14:00-15:30（開場13:30）
会場：森美術館展示室内
定員：80名（要予約）
料金：無料（要展覧会チケット）
お申し込み：受付終了しました

■ シンポジウム
「リー・ミンウェイについていろいろ考える」　※日英同時通訳付

リー・ミンウェイの作品は、アーティストが社会に対してどのように関わっていけるのかという課題を考えさせます。本シンポジウムでは、社会学、心理学、コミュニティ・デザインの専門家とともに、リー・ミンウェイの多岐にわたる実践に通底する作品の非永続性を起点に考えます。

出演：ピエランナ・カヴァルキーニ（イザベラ・スチュワート・ガードナー美術館 現代美術キュレーター）
ハーヴェイ・モロッチ（ニューヨーク大学社会学・大都市学教授）
グレン・ウォートン（ニューヨーク大学美術館学特任准教授）
片岡真実（森美術館チーフ・キュレーター）
菊池宏子（森美術館エデュケーター）
日時：2014年11月14日（金）19:00-21:00（開場18:30）
会場：アカデミーヒルズ（六本木ヒルズ森タワー49階）
定員：150名（要予約）
料金：一般1,000円、MAMCメンバー無料
主催：森美術館
協力：アカデミーヒルズ
お申し込み：森美術館ウェブサイト www.mori.art.museum

ピエランナ・カヴァルキーニ

ハーヴェイ・モロッチ

グレン・ウォートン

■ キュレータートーク
「リー・ミンウェイとその関係について考える」　※日本語のみ、手話同時通訳付

本展担当キュレーターが、「『関係性』を考えるための作品」として展示する鈴木大拙やジョン・ケージ、アラン・カプロー、リクリット・ティラヴァニ、小沢剛といったアーティスト、宗教家、思想家を読み解きながら、リー・ミンウェイとその関係について考えます。

出演：片岡真実（森美術館チーフ・キュレーター）
日時：2014年10月31日（金）19:00-20:30　（開場18:30）
会場：森美術館展示室内
定員：80名（要予約）
料金：無料（要展覧会チケット）
お申し込み：森美術館ウェブサイト www.mori.art.museum
※手話同時通訳をご希望の方は、10月21日（火）までに、ppevent-mam@mori.co.jpへご連絡ください。

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報：瀧、町野、戸澤
Tel: 03-6406-6111　Fax: 03-6406-9351　E-mail: pr@mori.art.museum　Web: www.mori.art.museum
〒106-6150　東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー 森美術館

■ トーク
「リー・ミンウェイと禅について考える」※日本語のみ

佐々木 閑

本プログラムでは、仏教哲学の専門家である佐々木閑氏をお招きし、東洋的な思想、特に禅思想からリー・ミンウェイ作品について考えます。

出演：佐々木 閑（花園大学教授）、広瀬麻美（森美術館シニア・コンサルタント）
日時：2014年11月18日（火）19:00-20:30　（開場18:00）
会場：森美術館展示室内　　**定員**：80名（要予約）
料金：1,500円（展覧会チケット付）、MAMCおよび年間パスポートメンバー無料
お申し込み：森美術館ウェブサイト　www.mori.art.museum
※プログラム開始前18：00-19：00の間、プログラム終了後20：30-21：30の間、本プログラムにお申し込みいただいた方のみ展覧会をご鑑賞いただけます。また、お配りする展覧会チケットで、後日展覧会をご鑑賞いただけます。

■ ギャラリートーク　※日本語のみ

森美術館スタッフが、展示室内でツアー形式のトークをおこないます。

日時：【1】2014年10月22日（水）　19:00-20:00　　【4】2014年12月　3日（水）　14:00-15:00
【2】2014年11月　5日（水）　14:00-15:00　　【5】2014年12月17日（水）　19:00-20:00
【3】2014年11月19日（水）　19:00-20:00

会場：森美術館展示室内　**定員**：各回15名　**料金**：無料（要展覧会チケット）
お申し込み：不要（当日先着順、展覧会場入口にお集まりください）

■ こどもツアー

リー・ミンウェイの作品を一緒に体験したり、みんなで話をしながら、展覧会を楽しむツアーです。

日時：2014年10月25日（土）　10:30-12:00　**対象**：小学生　**定員**：15名（抽選）　**料金**：無料（要展覧会チケット）
お申し込み：9月20日（土）～10月5日（日）の間、森美術館ウェブサイトにて受け付けます。　www.mori.art.museum
※抽選結果は、10月6日（月）～8日（水）にメールにてご連絡します。

■ おやこでアート

ベビーカーに乗っている赤ちゃんから、小さなお子さままで、おやこでアートを楽しむツアーです。
ご希望のツアーをお選びください。

対象：未就学児（0～6歳）とその保護者　**定員**：各回10組（抽選）　**料金**：無料（要展覧会チケット）

【1】ベビーカーツアー

小さなお子さまを連れた保護者の方を対象としたツアーです。ベビーカーでご来館されても安心してお楽しみいただけます。

日時：2014年11月29日（土）　【1】11：00-12：00　【2】14：00-15：00
お申し込み：両回とも9月20日（土）～11月3日（月）の間、森美術館ウェブサイトにて受け付けます。　www.mori.art.museum
※抽選結果は、11月4日（火）～6日（木）にメールにてご連絡します。

【2】おやこでおしゃべりツアー

おしゃべりを始めたお子さまと、作品を見ながら展示室を回るツアーです。
お子さまの視点に立って、おやこで一緒にお楽しみいただけます（3歳以上におすすめです）。

日時：2014年12月9日（火）　【1】11：00-12：00　【2】14：00-15：00
お申し込み：両回とも9月20日（土）～11月9日（日）の間、森美術館ウェブサイトにて受け付けます。　www.mori.art.museum
※抽選結果は、11月10日（月）～12日（水）にメールにてご連絡します。

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報：瀧、町野、戸澤
Tel: 03-6406-6111　Fax: 03-6406-9351　E-mail: pr@mori.art.museum　Web: www.mori.art.museum
〒106-6150　東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー 森美術館

耳と手でみるアート ※日本語のみ

視覚に障がいがある方を対象とした、スタッフとの対話を通して作品を楽しむツアーです。一部の参加型作品を体験しながら、リー・ミンウェイの世界をさぐります。

日時：2014年12月6日（土）　10：30-12：00
対象：視覚に障がいがある方
定員：6名（要予約）
料金：無料（要展覧会チケット）
お申し込み：森美術館ウェブサイト www.mori.art.museum または、電話（03-6406-6101）

手話ツアー ※日本語のみ

手話と言葉で展覧会を楽しむツアーです。手話をお使いにならない方も気軽にご参加ください。

日時：【1】2014年12月　6日（土）　14：00-15：00
　　【2】2014年12月19日（金）　19：00-20：00
対象：一般
定員：10名（要予約）
料金：無料（要展覧会チケット）
お申し込み：森美術館ウェブサイト www.mori.art.museum または、ファックス（03-6406-9351）

※出演者は予告なく変更になる場合があります。予めご了承ください。
※その他、学校プログラム、ワークショップなども予定しています。

パブリックプログラムに関するお問い合わせ：
森美術館 パブリックプログラム
電話：03-6406-6101（月〜金：11:00-17:00）　Fax：03-6406-9351　E-mail：ppevent-mam@mori.co.jp

関連情報

展覧会カタログ

森美術館での展示風景写真も入った展覧会カタログが10月下旬に発売されます（予定）。

執筆者：片岡真実（森美術館チーフ・キュレーター）
　　イ・スキョン（テート・アジア太平洋リサーチ・センター リサーチ・キュレーター）
　　ハーヴェイ・モロッチ（ニューヨーク大学美術館学特任准教授）&グレン・ウォートン（ニューヨーク大学社会学・大都市学教授）
サイズ：A4変型（28.2×21 cm）
ページ数：232ページ（予定）
言語：日英バイリンガル
価格：3,500円（税込、予定）
制作／**発行**：森美術館／株式会社美術出版社
発売日：2014年10月下旬（予定）

プレスリリース　お問い合わせ　森美術館 広報：瀧、町野、戸澤
Tel: 03-6406-6111　Fax: 03-6406-9351　E-mail: pr@mori.art.museum　Web: www.mori.art.museum
〒106-6150　東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー 森美術館